

---

## セッション3 「流域管理におけるコンフリクトの克服と合意形成」

---

### 「バングラデッシュにおけるより良い地域自然資源管理のための合意形成

#### －水平的・垂直的拡大への展望－

---

#### ロジャー・ルインズ（水産資源コンサルタント、英国）

どうもありがとうございます。おはようございます。

まず、始めるに当たりまして、地球研や谷内先生に御礼を申し上げたいと思います。このようにお招きいただきまして、非常にうれしく思っております。

タイトルですが、コンセンサス・ビルディングということで、バングラデッシュの例を申し上げたいと思っております。バングラデッシュと日本とはかなり状況が異なるわけですが、私のプレゼンテーションの中に、琵琶湖プロジェクトにおいても使っていただけるようなヒントがあるのではないかと思います。特に田中拓弥先生から昨日マイクロレベルというお話があったわけですが、そのことに関連しているのではないかと思います。

まず最初に、このプロジェクトに関与したリサーチのパートナーの人たちであります[図 2]。たくさんの実務家、NGO の皆さんがこのプロジェクトに参加してくれました。これは2年間のプロジェクトでありまして、2001年に終了したプロジェクトであります。

まず、2つの英国の機関はニューキャッスルの機関ですが、ポーツマス大学の代表として私は参加いたしました。国際的にはペナンに主体を置いておりますイクラーム (ICLARM) も参加いたしました。そしてバングラデッシュの天然資源研究センター、そして先進研究センターも参加いたしております。

これが実務家の、国際的な機関カリタス (CARITAS) と Banchte Shekha でした、女性問題を特に専門としている NGO であります。実際にコミュニティとインタラクションを行い、現地において草の根レベルで仕事を行われました。

資金に関しては、英国の国際開発省 (DFID: The Department for International Development) によって調達されました。また特に土地と水のインターフェースなどの問題に直面している国に提供される資金が、特別に提供されたわけがあります。そしてバー (Julian Bar) さんという方も、このプレゼンテーションの準備に貢献してくれました。

さて、コンセンサス (Consensus) とはどういう意味なのか、またコンセンサスに対してコンフリクト (Conflict) というのはどういう意味なのでしょう。まずコンフリクトに関しましては、様々なステークホルダーが、非常に異なった立場にあり、必要性や価値観も異なっているということを意味します。例えば管理の変化、変更に対しての抵抗が例として挙げられますが、これは必ずしも暴力的なものとは限りません。変化、変更に対する穏便な方法での反対、抵抗も含まれます。

「バングラデッシュにおけるより良い地域自然資源管理のための合意形成  
—水平的・垂直的拡大への展望—」

コンセンサスに関しましては、すべてのステークホルダーが自分たちの立場を強化したいと望むことを意味します。ですから、単に合意ということだけではなくて、合意から大きなメリットを享受したいという気持ちが強いということです。このコンセンサス是对立を解決するというだけではありません。対立がない場合でもコンセンサスがないということもあるわけです。

そしてもう1つの見方ですが、ちょっと複雑な図になっておりますけれども、基本的にこういった形になると思います。どれだけ自己的か、利己的かということにも関連していると思います[図4]。

一方で、いかにコミュニティに対しての貢献意識が高いかということです。縦軸にコミュニティに対する関心（Concern for others: 'Community'）、そして横軸に個人主義（Concern for self: 'Individuality'）といいますか、利己主義といいますか、そういったものを置いております。それに対して3つのアウトカムといいますか、結果があると思います。

まず、右下に、「論争（contending）」があります。ですから、他人に対する関心よりも自分に対する関心が非常に強いということで、自分が絶対勝たなければいけないということで論争が始まるわけです。一方で、自分よりもコミュニティに対する関心が高い場合は「譲歩（yielding）」するわけでありまして、議論があった場合、譲歩するわけでありまして、そして、両方とも個人主義でもなく、またコミュニティに対する関心も低い場合は、「撤退（withdrawal）」といいますか、少し議論から抜ける。一抜けたという感じの姿勢をとると思います。その中央にあるのが「妥協（compromising）」でありまして、何かを犠牲にしながらか何かを得るということです。完璧ではありませんが、何かを犠牲にしながらか何かを得る。

そして右上であります、「問題解決（problem-solving）」であります。これはすべての人たちがその利益を得るということの意味を意味します。win・winの関係です。同じサイズのケーキをみんなで分けるといいます。みんながそのケーキを味わうという意味で、みんなで分けるといことが問題解決になるかと思っております。このように、ステークホルダーは自分の立場を強化しようとするわけなんです。言い換えれば、すべての人たちが何らかの勝利を収めるということです。これがこのプロジェクトの根本となっている原理原則と言っているかと思っております。

次に、対立や議論に対してどのようにアプローチするかについてですが、スペクトルで示しました[図5]。一番右側にある「仲裁（arbitration）」は、対立を解決する上での、あるいはコンセンサスを構築する上での、トップダウンのアプローチであり、第三者によって推進されます。これを仲裁と呼びます。ですから、レフリーや、判事のような役割の人が存在するわけです。そして、真ん中の中央にいきますと、「調停・仲介（mediation）」となります。これは二者の間の仲介者、あるいは介入者、調停者が関わってくるということになります。

そして、特に私たちが関心を持っているのが左側「light facilitation」であります。これは内発的にコンセンサスを構築するというわけです。したがって、外部からの関与は非常に軽度になります。ここに我々のプロジェクトが位置づけられると考えます。

さて、コンセンサスというのはバングラデッシュの地方においてどういう意味を持っているかということですが、2つの時間スケール、短期（short/mid term）と中長期（mid/long term）があります。短期におきましては、ステークホルダーやコミュニティが自らの管理に対して意思決定を行うため、集約的な意思決定を行って、合意に達したいわけです。それを実際のアクションに持っていかなければなり

ません。ただ言うだけではなく、議論だけではなく、何らかの介入を行動として示すということであり  
ます。

そして、中長期の目標に関しては、これは主に、国際的なドナーの関心事ではありますが、何かもつと  
恒久的な、永久的な変化が欲しいのです。したがって、地方のステークホルダーと全国的な国の  
政策者との関係づくりができるわけです。それが社会関係資本（social capital）でして、セキュリテ  
ィネットワークと呼んでもいいかもしれません。これはアマルティア・センの「貧困と飢饉」で出てく  
るのですが、余り脆弱でない人たちに社会的な結びつきを与えて、社会的なネットワークを構築し、苦  
しいときに、脆弱な人が脆弱でない人に依存するというものです。

長期的には、国際ドナーの目標である、永続的な社会関係資本を構築するという、そして内発的  
な（endogenous）計画をつくるということが目標となります。第三者のファシリテーションがなく、  
内発的な計画を生み出すということです。

さて、コンセンサス構築の方法論の概要に移りましょう。ほとんどの文献はアメリカ合衆国の経験に  
基づいていることがわかりました。市民権運動がたくさんのコンセンサスの構築につながっております。  
例えば人種差別をなくすという場合ですが、いろいろなグループがその意思決定に参加したいというこ  
とを主張するわけです。あるいはビジネスや企業の枠組みの中にもいろいろなテクニックがあります。  
大きな企業は非常にコストのかかる訴訟を避けるために、社内で色々な問題を解決したいということで、  
コンセンサス構築の方法論を見出しております。

このような文献や経験の中で、利害（Interests）と立場（Positions）の違いに関して述べられていま  
す。利害は、プライベートな動機と利害・関与にかかわるものです。一方で立場は、公共の宣言やスタ  
ンスにかかわるものです。これらは、大変異なるものです。

また、集団の相互作用（group interaction）の理論についても研究を行いました。これはアメリカの  
ケイナによって開発されたものであります。ワークショップなどで、ディスカッションがあるとき、最  
初はいろいろな分岐した見解がありますが、次第に収斂するといいますか、意見が重なって複合してき  
ます。そして、さらに最終的には、何らかの合意に達するというものです。この過程では、よく慣れ親  
しんだ色々な意見があったり、普通の一般的なグループ・ダイナミクスが働いたりします。ですから、  
本当の意味で異なった意見を出し合うというのではなくて、いつも一般に聞き慣れたような議論  
（business as usual）が色々なされるのです。でも、本当の意味での参加型の意味決定（Real  
participatory decision making）とはどのようなものなのでしょう。本当の意味で参加してい  
ない意思決定は2時間ぐらいで終わってしまいますが、本当の意味で意思決定に参加してもらうためには  
2週間ぐらいの議論が必要です。だから、こういった大きな絵になるわけであり、最終的には右の  
一番端に合意に達することができるということになるわけです。

私たちは、以上のような概念的・理論的な分析の上で、さらに合意形成のためのツールを加えており  
ます。これは参加型の評価に従来使われているツールでして、例えばステークホルダーの分析法  
（stakeholder analysis）が挙げられます。これはコミュニティ（community）の考え方を、まず適切  
なステークホルダーのグループに分け、そのグループごとに分析していく方法をとります。コミュニ  
ティというのは簡単なものではありません。複雑かつ様々なステークホルダーの利害関係が、コミュニ

「バングラデッシュにおけるより良い地域自然資源管理のための合意形成  
－水平的・垂直的拡大への展望－」

ティの中にも存在するというを考えていかなければいけないのです。この他にも様々なマッピングやランキング (Mapping & Ranking) を行うことによって、グループの中におけるディベートを導き出すというやり方や、ステークホルダーのマトリックス (stakeholder matrices) というやり方があります。後者は、ステークホルダーがお互いの問題を理解し合うための方法論です。

参加型意思決定プランの開発 PAPD (Participatory Action Plan Development) の上で、ここでは、ステークホルダー・アナリシスという方法を用いました。これを用いたのはコミュニティを理解するためです。まず、コミュニティを幾つかのステークホルダーのグループに分けました[図 11]。バングラデッシュの一般的な氾濫原は、以下の人々によって成り立っています。まず地主 (land-owners) がいます。そして分益小作人 (share-croppers) と呼ばれる人たちがいます。そして土地のない一般労働者 (landless)、そして漁師 (fulltime fishers) がいます。最後の 2 つのグループが最も貧困なグループになります。さらに、二次的なステークホルダーである、地方自治体の人々にも、アプローチいたしました。

次のステップ 2 は、問題意識調査 (problem census) です[図 2]。各ステークホルダーのグループと連絡をとって、彼らの生活において何が問題か、彼らがなぜ貧困なのかということを知りました。これは一般的なやり方です。このステップで、ステークホルダーに関して、私たちはかなり学ぶことができました。しかし、それだけでは、非常にすぐれたレポートを書くことはできても、ステークホルダー自身が自分たちの問題を理解すること、あるいはお互いの問題の理解にはまだ至っていません。

そこで、次にステークホルダーに対して何をしたらいいかと、自分たちの問題をミーティングの中で発表してもらいました (planning workshop) [図 13]。4つのグループがこのミーティングに参加しまして、それぞれがプレナリー、あるいはグループセッションで自分たちの問題を発表し合ったわけです。この段階では、その暫定的な解決策として、どういったものが考えられるかということも発表し合いました。そして、さらに4つのグループを、それぞれ異なるステークホルダーごとに分けました。2日間、お互いに自分たちが提案した解決策を評価し合うということをしたのです。そして最終的にまた一つにまとまりまして、いろいろな評価やディスカッションを行いました。これがコンバージェンス、複合収斂です。ここで初めて合意に達することができるのです。

この参加型のアクションプラン開発の結果として得られたのは、どのように問題を解決していったらいいかという解決策とアクションに対してのコンセンサスを得ることができ、その草案をつくることのできたということです。さらにもっと詳しいプランニングが必要ということでしたので、詳しいプランニングを行いました。また、実行委員会を設置し、可能であればその委員会が法的に認証されるよう、それを登録し、最終的にはアクションということで行動に移したのです (Action plan implementation) [図 14]。

そして、さらに二次的なステークホルダーの参加も促しました。つまり、政府の組織、そして NGO 両方、あるいは選ばれた代表者、あるいは二次的なステークホルダーとして他の人々にも関与してもらいました。それぞれの折衝の各段階に参加してもらったのです。というのは、これによって、重要性を加えることができるのです。地方自治体の政府の代表がそこに参加するというので、この問題がいかに深刻であるか、重要な問題であるかということをより認識することができるわけです。



こちらは女性のグループです。問題をどのように対応していくかという話し合いをしています。こちらは問題を一覧にいたしまして、一般の人々にも見ていただいています。これは一般の人々との討議の場です。この場には地方自治体の代表やNGOのスタッフも入っています。

もう少し詳しく、これまでの方法を整理してみましょう。まず初めに、どういう問題があるかということ进行调查しました（Problem Census）。どのような生計上の問題があるのかということをお話し合いまして、そして問題が何かということをおリストアップしました。そして、なぜこういった問題が起こっているのかということをお要因分析を行い、さらに可能性としてどういう解決法があって、そのプライオリティーがどうであるかについて探りました。その上で、資源をマッピングし、そしてスケジュールということでカレンダーダイアグラムをつくり、これから季節を通じて1年間こういった形でやっていくという問題解決のカレンダーもつくりました。

次にワークショップを開催しました（Planning workshop: opening plenary）。ステークホルダーがまた集合して会議を開きました。こちらのほうは問題をクラスターしたのです。つまり、問題というのはお互いに関連性がありますから、天然資源をベースにして、問題をくくるという形にしました。傾向などに関しては別の形にしました。関連のある当局としては天然資源に話を絞り込もうとしまして、そののところだけお話ししました。そして問題をくくるということを分類ごとに行って、どこが一番重要なのかによって、プライオリティーをつけました。

今度は、また、それぞれのグループに戻りまして、特別な参加型のステップ分析というものを導入しました（Planning workshop: stakeholder sessions）。このステップ分析におきましては、みんなに解決法（intervention/solution）を編み出してもらいました。社会（social）、技術（technical）、環境（environmental）、そして政治（political）、持続可能性（sustainability）という項目によって、解決法を考案してもらいました。後で例を申し上げます。解決法につきましては、どういうシナリオならば現実に即しているだろうかということをお考えてもらいました。また、ステークホルダー間の影響について考えるセッションにもなりました。また、代替となるようなものがないか、そしてプラスマイナスのような効果が出るかということの分析をしました。

このSTEP analysisのスライドは、余りにも字が細かいので、各項目について、簡単に申し上げるだけにします。こちらのほうの解決法といたしましては、水路を再び掘っていくということです。カールというのはバングラデシュ語で水路を表します。社会的な要件としては、ステークホルダーが必要であるということで、地主の同意や、地元の政治家、エンジニアの協力、また労働者グループの同意も必要であるということが書かれています。

では、技術的な分野ですが、この水路に関しましては長さが1.5 kmでなければいけないということが明らかになっておりまして、幅は20フィート、そして深さは8フィートとなっています。これは彼らが技術的にこうしたいとってリストアップしました。環境的な影響がどうなるかについては、魚の回遊がどうなるか、水がどのようになるか、フレッシュになるか、魚の疾病が少なくなるか、生物多様性を増加できるかどうかということです。持続可能性に関しましては、管理なしでは10年間持続するのに対して、このプランテーションが行われるようになったならば13年間持続するという形で予測しています。

「 Bangladeshにおけるより良い地域自然資源管理のための合意形成  
— 水平的・垂直的拡大への展望 —」

次に、この **Impact on other stakeholders** のスライドですが、ほかのグループのインパクトが何であるかということをはっきりと示したものです。こちらのほうはマトリックス型で解析をいたしました。こちらのほうは農家に対するインパクトということで、4つ、5つの影響度を見ています。例えば水路や排水路をつくった場合、また魚をとることを制限した場合と制限しなかった場合、そして放流をした場合と放流しなかった場合とで、各ステークホルダーに対してどのようなインパクトがあるかということを見ています。こういった2つの項目に関しましては漁業従事者がマイナスの効果を得るという形でリストアップして、マトリックス型に示すようにしています。

このような、コミュニティの幾つかのステークホルダーへのグループ化 (Step 1) —グループごとの問題意識調査 (Step 2: problem census) —ワークショップ開催 (Step 3: planning workshop: opening plenary) —参加型のステップ分析 (Step 3: planning workshop: stakeholder sessions) のプロセスを経まして、7~8日たってから、セッションの最後で、こういったステークホルダーの成果物が出てきたかということ比べます (Step 3: planning workshop: closing Plenary)。そして討議をいたしまして解決を見て、そしてアクションプランとして、我々が問題としていることの解決法に対して合意をとります。そして、その後で実行委員会の方にアウトラインを見せて、合意を得た後に、アクションプランを実行していくという形にします (Step 4: action plan implementation)。

以上が、私たちが開発した、参加型意思決定プランの方法の説明です。それでは、この方法の実行に当たって、実際的な問題 (Practical issues) はどういったものでしょうか。非常に様々な努力が必要です。Bangladeshの人々は教育レベルもそんなに高くありませんので、指針が必要となります。よって NGO と協力して、スキルを持った人々がファシリテーターとなって関与していかなければなりません。そしてまた、できれば成果物は柔軟性をもって対応できるような形にしておかなければいけないということ。そして全員を内包したものをやるということで、色々な人々を取り込んでいくことが必要です。

また、これと関連しているのですが、2次的なステークホルダー、例えば政府であるとか、当局であるとか、サービスプロバイダーといったような人々にも対応していくことが必要です。また、期待していないような成果物が出たときや、ステークホルダーが我々の考えていないようなことを出してきたときにも、それに対して我々はオープンでなければいけません。でも、1、2週間、また4週間でもできるものではありません。ワークショップそのものは7日や8日で終わるわけですが、実際に実行委員会で行うことに関しては、かなり長いプロセスを覚悟しておかなければなりません。

では、通常 Bangladesh から出てくるような成果物とはどんなものでしょうか。これがステークホルダーのリストです [図 23]。こちらは氾濫原のステークホルダーのリストです。2つの上のほうですが、下の2つとはちょっと違います。上のステークホルダーの方が、お金があります。そして土地もあります。また、農業をしたいと思っていて、乾期においても色々な米をつくりたいと思っています。よって、水利が冬の作物にとっても非常に重要になります。

しかし、下の方のステークホルダーの関心事は、こういった土地を別の方向にも使いたいと思っています。多面的な利用をしたい、食べるものをそこで何とか収穫したいということです。そして漁業をしたいというふうにこの下の2つのステークホルダーが言っているのです。でも、地主や分益小作人

のほうは、水を使って冬も作物をつくりたいと思っています。

では、両方のグループに対して影響があるような問題とはなんでしょうか。もともとの問題として、土地がシルト化しているという問題があると思います。ガンジールダでは、その土壌はシルト化しており、実際に水路がシルト化（沈泥化）しているのです。そして、水がそこでたまってしまって、停留してしまいますから、酸素もなくなってしまいます。そうすると灌漑も大変になります。漁業を営む人々、それから土地のない人々に関しては、漁業をする場所もなくなりますし、魚も入ってこない。そして魚の母集団が非常に少なくなっているということで、生物多様性も少なくなるという問題を抱えています。

そこで、お互いに便益をもたらすアクションはどういった形で可能となるか、両方のグループをサポートできるものは何かということを考えました。上の二者を含むグループに関しては、まずは水路を再び掘るといことが解決法になりました。こういった灌漑システムをさらに再生し、そして水の量を上げて、淡水やフレッシュな水を入れ込むということです。そして下のグループは、もっと魚がとれるところが欲しい、生物多様性が欲しいということで、これがこのグループにとっての便益となります。それでコンセンサスをとろうということで、いろいろなアプローチをとりました。四者すべてが満足できるような形にするということが必要です。

実行委員会では、この4つのステークホルダーのグループが話し合いまして、そして地元の二次的なステークホルダー、つまり地方自治体であるとか、NGO であるとか、技術関係のエキスパートにも入ってもらおうということをしております。先ほど申し上げましたが、水路や用水路を再び掘っていくこととなります。

では、長期的には、何が求められるのでしょうか。まず集合的なアクション（Collective action）が必要であるということ、そして地元のレベルでのアクションが必要であるということです。次に、制度化（Institutionalization）と書いてありますが、これは一般的かつ定期的にできるようにすることを目的としています。また、社会関係資本（Social capital）や資産を増加していくことも必要です。

バングラデシュの私たちの事例では、集合的なアクションがだんだんと出てまいりました。ちゃんと証拠として、コミュニティが今までやっていないことをやり出したという意味で、集団アクションが見られました。また、制度化に関してはある程度の成果を得ています。委員会はまだ残っていますし、そして実際のワークショップをやっています。でも、この原則がさらに適用できるかどうかについては、まだ定かではありません。社会関係資本に関しましては指標がありまして、短期的に改善があったという証拠が出ています。しかし、制度化しない限りは、社会関係資本が増加するかどうかということはまだ確定していません。

もちろん、合意を形成するにはいろいろなアプローチがあると思うのですが、私がとりましたのは、これまで説明した PAPD（Participatory Action Plan Development）という方法です。参加型のアクションプランをつくっていくということですが、これは2年前にこういった形で、左から右に、そしてトップダウンのアプローチで考えたものです。PAPD はトップダウンのアプローチとしてここに書いていますが、これには外のインセンティブが必要で、セクター主導型です。よって、経営管理の意思決定がここでされるという形になるわけです。天然資源保護の機関がありますが、そこで経営管理の意思決定を行いますが、こちらのほうが実際に仲裁されるという形になります。意思決定が行われた後、マ

ネジメント側において政策を持っていくということで、短期的な目的を果たすことができます。しかし紛争がまだあるということで、ポリシーをプレッシャーとして押しつけてしまう可能性があります。

ちょっとうまくスライドが動きません、すみません。後でプリントアウトしてお見せします[表 1]。比較のために、まだ4つコラムがあったのです。

さて、このプロジェクトですが、バングラデッシュ・プロジェクト、コミュニティベース漁業管理プロジェクトということで、ワールド・フィッシュ会議がスポンサーとなっています。22のサイトでプロジェクトとして行いました。我々のPAPDは、こういったコミュニティにおいて、今、実施の途上にあります。またDFID、それからイギリスのプロジェクトの一環ともなっております。またIUCNのプロジェクトとも関わっています。バングラデッシュ以外では、メコンデルタ、ベトナムでワールド・フィッシュ・センターがスポンサーとなって、我々のPAPDが手法として使われています。それで、私たちは、次のステップとして、これをアップスケールしたいと考えております。水平的な方向というよりも、政府とこれをリンクして行って、上のほうに持っていきたいと考えております。

こちらのほうはインター・ミディエート・テクノロジー・グループがやっているものです。地元のサービスプロバイダーと協力しています。現在やっているのは、こういったプランができたときに、サービスプロバイダーの方がそれに関与するというので、非常に熱心にやっていきたいと思っています。

また、いろいろな利害関係者がここに入っているのです。そして影響力を持つグループが必要です。これは簡単にこのような直線型の垂直型の、ちょうど琵琶湖と同じように、こういった影響を与えることができます。マイクロからメゾのレベルという形で、メゾレベルでちょっと経験はあるのですが、さらにそれをNGOから持って行くとなると非常に難しいので、ちょうどこの3分の1の下のところで行っているという形になります。

ありがとうございました。

## 質疑応答

田中（拓） どうもありがとうございました。

ごく簡単に事実関係のご質問などがございましたら、どうぞよろしくお願ひいたします。

和田 非常に私にもわかるおもしろい話で、本当にありがとうございました。

こういうプランニングをするときに、タイムスケールのセッティングはどういうふうを考えていくのでしょうか。問題の解決に至るまでの時間幅ですね。1年なのか、何カ月でやるのか。その辺のところは具体的にはどういうふうにセッティングするのでしょうか。

ルインズ とてもいいご質問だと思います。タイムスケールは、コミュニティがデザインし、そして合意をするというものです。通常は即インパクトをとりたいと思うのです。ですから、インセンティブとしてはもっと早くやりたいと思うのが普通です。しかし、残念ながら、バングラデッシュにおいては制約がありまして、こういった自治体とか技術的なエキスパートを入れなければいけないので、ちょっとス

ローダウンしてしまいます。我々はぜひコミュニティに対して、こういったタイムテーブルをつくって、そしてちゃんとデッドラインを決めなさいと言っています。コミュニティはこういったことをやっていて、ちゃんといついつまでにしたいと言っています。こういったプロセスは交渉のときには必要です。ですから、ワークショップは8日ぐらいで終わりますが、誰が関与するか、そして実際にどの部分を誰がするかということを決めるには交渉が必要なのです。ですから、各段階において、次はここまでやる、次はここまで実行するというデッドラインを決めています。こういったプロジェクトに関してはいろいろな介入がありまして、そして大きなプロジェクトの一環としてやっているわけです。これは95年からやっております、そして2年間ずっと続いているものです。ですから、こういったプロジェクトや、計画の実行が達成されるのを待っているという状態です。

**柿澤** 大変興味深いお話をどうもありがとうございました。

このプロセスの中で、すべてのステークホルダーを入れるということで、豊かな人ですとか土地所有者も入れるとのことですが、例えば実際の議論の場で、そういう豊かな資源を持った人々と貧しい人々というのが対等な立場で、素直に自分たちの思いを出し合って議論ができるのかということちょっと疑問に思いましたので、どういう形で実際に議論が進んでいるのかについて少し教えていただければと思います。

**ルインズ** これも非常にいいご質問だと思います。バングラデシュのよいNGOは、そういったことが問題であるということを知っています。特に参加、参加というふうにジャーゴンとして使われるのですが、意味が本当にわかっていないようなところもあるのです。よって、こういったステークホルダーのグループを別々にして、まずはセッションをとってもらおうということを行います。これはもちろんオープンに、そして正直にしゃべってもらうためです。そうすると、まずは自分たちそれぞれのステークホルダーのセッションをしてもらうということですから、好きなことをまず言うわけです。

それから、個人のセレクションに関しましては慎重にやっています。ファシリテーターはそこにずっと住んでいる人で、そしてコミュニティからも信頼されている人を選ぶということにしています。そしてまた発言する人、シャイであんまり発言できない人を、いろいろミックスして、そういった人を選ぶような形になっていますし、できるだけ発言してもらおうように説得しています。もちろん、実際に公共の場で、そしてこういうふうな結論づけるためには、前に出ると何を言うか躊躇すると思うのですが、バングラデシュではやはりエリートが議論をコントロールしてしまう傾向もありますので、少し慎重にセレクションを行い、ファシリテートすることが必要です。



# Consensus Building in NRM - a Typology

<p>“Type A” Establishment of NRM initiatives</p>	<p>“Type B” Problem-solving within NRM initiatives</p>	<p>“Type C” Promotion of mutually-beneficial collective action</p>	<p>“Type D” Local processes to create consensus &amp; avoid conflict</p>
<p>“Collaborative management” of conservation-related projects</p>	<p>Alternative Conflict Management to overcome obstacles to successful implementation</p>	<p>PAPD to identify problems and reach envisioned futures</p>	<p>Local dispute resolution</p>
<p>Pursuit of sectoral or agency objectives</p>	<p>Balancing multiple stakeholder objectives</p>	<p>Mutual learning and inclusive planning</p>	<p>Traditional / pre-existing approaches</p>
<p><b>arbitration</b></p>	<p><b>mediation</b></p>	<p><b>facilitation</b></p>	<p><b>fac / med / arb</b></p>
<p>Short-term objectives met / underlying conflict may remain / enforcement may be required</p>	<p>Project goals achieved / consensus specific to project design / impact may not outlive project / trade-offs negotiated</p>	<p>Social capital reinforced / collective action promoted / effects to outlive facilitation period / stakeholders empowered</p>	<p><i>Status quo</i> maintained</p>